The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞「ジェントルマン資本主義」とイギリス帝国主義 ： いかに発想し、深めたのか
Author(s)	Cain, Peter; 永井, 章夫
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1997, 7, p. 173-178
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ジェントルマン資本主義」とイギリス帝国主義

——いかに発想し、深めたのか

ピーター・ケイン*
永 井 章 夫 訳**

はじめに

「ジェントルマン資本主義」という着想を、トニー・ホプキンズと私が発表した理由と、イギリス帝国史に適用するようになったのかについてお話します。あわせて、我々の新解釈に対して寄せられた批判にも少しふれます。

ジェントルマン資本主義とは何か

1）個人的な諸点

まず、ジェントルマン資本主義の概念をどのようにして私が思いついたのか説明しておきましょう。1940、1950年代、私がまだ年少だった頃、ランカシアで、産業資本主義の現状をつぶさに見たことに始まります。この体験は、後のオックスフォードでの大学生活とはくっきりと違ったもので、深く考えさせられました。オックスフォードの人たちの大部分は、サーヴィス部門のさまざまな分野の出身者であって、ロンドンのシティが彼らにとって重要な意味をもっていることです。また、気づいたのは、オックスフォードやケンブリッジの学生の大半がやって来るパブリック・スクールが、エリート教育の供給元で、これらの人たちがイギリスの政界、実業界、社交界を牛耳っていることでした。若い学生として私は、この力と影響力の源泉に興味を持ち出しました。しかし直接的に研究を始めたのは1970年代の中頃、バーミンガム大学に行ってからです。

＊シェフィールド・ハーラム大学　Department of history, Sheffield Hallam University, U.K.
＊＊兵庫県立尼崎高等学校教諭

2）サーヴィス部門と「ジェントルマン資本主義」の源泉、シティの歴史

ホプキンズと私が、イギリスの資本主義の特質と発展を把握するのに力になったのは、この20年間のサーヴィス部門の成長とシティの歴史についての研究の深化です。これがなくては、到底、ジェントルマン資本主義の概念を構成することはできなかったでしょう。ここから、1870年頃からイギリスを支配したエリートは、サーヴィス部門、シティ、そして双方にまたがるもの、さらにイギリスの伝統的な土地所有での富から生まれたものとわかりました。また、ジェントルマン資本家として成長する経済エリートが、イギリスを統治する政治家や行政官の主体となっていることもわかりました。

3）ジェントルマン資本主義と帝国主義との結びつきの起源

1966年、私がバーミンガム大学に行ったとき、イギリス帝国史を教えるようにいわれました。ここで、ホプキンズ教授と出会いました。彼は西アフリカ史の専門家でした。イギリス帝国主義への関心が一緒でしたから、合体した講座を共同で担当するようになりました。経済史家として、イギリスの経済的変容がイギリス帝国主義に重大な影響をあたえたという点について、直観的に同意見となりました。そして、ロビンスン、ギャラハー以来の帝国主義についての支配的解釈と対立することになりました。彼らは1870年以降のイギリスの経済的変容とアジア、アフリカにおける大英帝国の拡大とは関係ないとしています。われわれは、一方で、ホブスンとレーニンの定義にも満足できませんでした。ふたりは金融帝国主義だけに注目しており、それでは産業を帝国主義とつなぐことができないように見えたからです。1970年代の後半までに、産業の変革が何らかの形で、イギリス帝国主義の動機になっていると信じるようになりました。また、ホブスン、レーニンの説は、いかに経済変容が帝国主義の政治行動に影響するのか、説明していない点が難点であることを悟りました。言い換えれば、ふたりの説では、ロビンスン、ギャラハーが帝国主義の「政策担当者の判断（official mind)」と呼んだものが、どのように経済思想や経済からの圧力に影響されているかを説明できないのです。

私たちは、産業と帝国主義の因果関係を見いだすことができなくて、関心をサーヴィス部門とシティにむけるようになり、こうしてジェントルマン資本主義論に

行きついたのです。外国投資などの活動を通して帝国主義にいたる経済的衝動を準備し、また、シティと政治の舞台に届くサーヴィスとが提携する経済的思考にも連動する政治的エリートを生み出したことを究明しました。かくてジェントルマン資本主義論はホブスン、レーニン学説を修正することになりました。ホブスン、レーニン学説は金融の観点からのみ経済変革と経済的強制を説明していたものでしたから。また、これで政治権力の解釈方法を知り、ロビンスン、ギャラハーが言う政策担当者の判断の実際のあり方を見るうえでの新しい方法を獲得することができました。今や、政策担当者の判断がいかに経済と結びつくかを説明できるのですから。このように私たちは、帝国主義についての「古典的」理論とロビンスン、ギャラハーの理論の双方の弱点を克服しようと試みたのです。

誰がジェントルマン資本家か

次に、ジェントルマン資本家が貴族までさかのぼって考えられるのか、産業革命中もそれ以後も、いかにして富と権力を保持できたかを見てみます。ここで強調すべき点は、イギリス産業革命は世界で最初の事例でありましたが、貴族制のもとで農業と商業が革命的な自己転換をとげた後になって起こったものだという事実です。この経験と資本主義市場の原則から離れずにいたことによって、貴族は工業化の過程でも経済的利益を受け続け、その間も政治支配を維持することができたのです。

ジェントルマン資本主義の変容

その次の課題は、ジェントルマン資本主義の貴族的形態が1880年以降、シティと新興エリート層、パブリック・スクールで教育を受けた上層中流階級が力をふるう、もう一つの形態にいかに転換するかを説明することです。これは、ロンドンとイングランド東南部のサーヴィス経済の重要性と国際的なサーヴィスセンターとしてのロンドンの発展を強調することになります。ロンドンは、外国投資をするという一種のカルチュアをもっており、外国投資が1870年以降のイギリス経済の対外的な影響力を高める主因でした。

ロンドンのシティとジェントルマン資本主義

我々が提示した新解釈に対する最近のいくつかの批判点に照らして、ここではシティがどの程度ジェントルマン資本家のセンターであったか、シティにおいてジェントルマン資本家集団が本当に1880年以降シティの経済発展にとって重要であったかどうか、またシティが英国の支配エリートと1870年以降の政治経済にどうしてこのような重要性をもったのかについて検討してみます。

ジェントルマン資本主義と非公式帝国

ここでは、1880年以降の非公式帝国の広がりについての私たちの見解を発展させようと思います。そのために私たちの非公式帝国の範囲についての推論を、ロビンスンとギャラハーのそれと対比させてみます。彼らが強調するのは1870年以降における非公式帝国の衰退ということですが、私たちは次のように考えています。すなわち非公式帝国は、ラテン・アメリカなどいくつかの地域では拡大しており、その他の中東のような地域では衰退しているけれど、一見すると異なるこれらの諸現象には互いに関連性があるということです。

ジェントルマン資本主義と公式帝国

ここで、いま一度、私たちの接近方法とロビンスン、キャラハーのそれとの主要な違いを素描しておきたいと思います。彼らはインドが中心的な重要性をもった植民地であり、アフリカ分割を主としてインドとの関係において考えることが重要であると見ています。私たちは白人定住植民地の重要性を強調し、アジアやアフリカにおける従属地域のそれを小さくみています。さらにロビンスンとギャラハーは、インドを帝国の特殊な構成要素であって、帝国発展の一般的な説明によってその存在を解釈することはできないと評価しています。これまでのどのような説に比較しても、私たちの方法は、インドで起こったことをイギリス帝国主義の一般的説明に結びつけるうえで、より説得的であることを示したいと思います。

結論

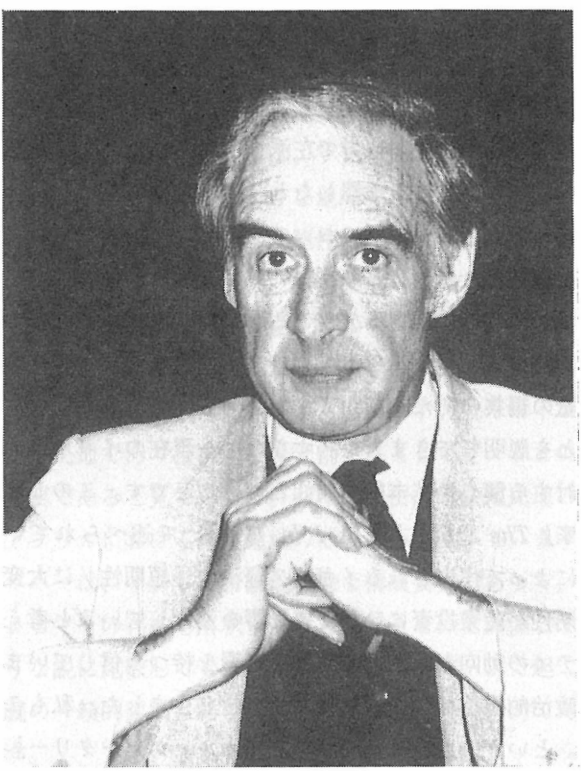
最後に私たちの議論がもっている現代的な意義と、イギリス帝国史の記述にどのような衝撃を与えるであろうかということを見てゆきたいと思います。

（1）いまやイギリスにおいて「ジェントルマン資本主義」が急速に死滅しつつあることは、『イギリス帝国主義』*British Imperialism*（1994）を著した時と比較しても一層明らかです。ロンドンのシティにおけるジェントルマン資本主義の経済的中心性は、1986年における“ビッグバン”の影響によって最終的に崩されつつあります。ジェントルマン資本主義が1980年代にひとつの概念としてはっきりとした姿をみせた理由は、たぶんそれが終末に近づき、それゆえ20年前のそれより簡単に特色づけられるものとなったからでしょう。

（2）われわれの著書の評価について興味深いことのひとつは、政治的立場を越えてある程度の賛意をえたことです。右派（保守党）には、シティと過去における帝国の重要性を肯定したと読まれました。他方で左派（労働党）には、金融が帝国主義の原因であったという彼らの見方を承認したと読まれたのです。さらに、デヴィッド・キナストンは『ガーディアン』紙において、「ジェントルマン資本家」という概念を、シティと産業界との分裂という長い間の神話と、最近の産業投資に対するシティの関心の欠如とを強調するために使用してきました。ウィル・ハットンは、イギリスにおける第一級の経済ジャーナリストでキャスターでもあり、現在『オブザーバー』紙の編集にあたっていますが、彼も「ジェントルマン資本主義」を使って次のことを説明してきました。すなわち、現在のイギリスにおいて長期的な産業成長に対する関心の基本的な欠如ということです。このことは、彼の著書『私たちの国家』*The State We Are In*（1994）で述べられています。ハットンは、シティによって代表されるイギリス経済の「短期性」に大変関心をもっており、この短期性が産業投資にひどく悪影響を及ぼしていると考えています。さらに彼は、シティの動向が政治に支配的な影響を持つと信じています。彼の著書はイギリスの政治的議論に大きな影響力を持ってきました。私もこの議論にかかわっています。というのも、私は『ポリティカル・クォータリー』誌の1997年1月号における経済政策をめぐるハットンの問題提起についてのシンポジウムで、歴史的背景について寄稿しているからです。『ポリティカル・クォー

タリー』は政治家や政治ジャーナリストに影響力のある雑誌です。

（3）より学問的な面について言うと、我々の著書によって、長い間無視されてきた帝国主義の経済的側面についての関心が回復することを望んでいます。また、帝国主義がイギリスの不可欠な部分であり、それなしにはイギリス社会は全く違った形で発展したであろうということを認識せずして、経済的な面でも政治的な面でもイギリスの発展を理解することは不可能であるということを、イギリスの経済史家、政治史家が納得してくれることを望んでいます。



（付記）

本稿は、1996年11月に日本学術振興会の招待で来日したケイン教授が、朝日カルチャーセンター・大阪の公開講座「ジェントルマン資本主義」で行なった講演の抄訳である。

公開講座の内容を本誌に掲載することを許可された朝日カルチャーセンター・大阪に対して謝意を表します。また特に、公開講座の実現の過程で大変な御尽力をいただいた前・講座第三部長の高木康行氏と、翻訳の労をとられた永井章夫先生にお礼申し上げます。

（秋田）